

地域から世界を考える 市民の知をめざして

押川文字

今号から『地域研究論集』は、誌名もあらたにA五判縦書きの『地域研究』として再出発する。

地域研究は今、大きな曲がり角にたっている。かつてない深度でグローバル化が進む今日、世界は諸地域の動きが瞬時に連動する運命共同体の様相を日増しに強めてきた。その共同体は、九・一一以降の動きが端的に示すように、一つの普遍的な論理が世界を覆うのではなく、様々な次元で生起する人々の想念と利害の接触と融合、対立と離反の過程そのものといってもよいだろう。この時代を読み解き未来を拓く知は、地球という運命共同体を動かす過程そのものに密着し、地球という広がりを見据えつつ、その現場から一つ一つ積み上げ構築することによってのみ可能になる。それは同時に、地域に関わる知が必然的にもつ実践的政策的な性格を深く自覚しつつ、未来を見据えた地球規模の市民の知として歩むことにほかならない。世界各地域を対象とする学際的研究分野として発展してきた地域研究は、研究という殻に閉じこもることなく、より広い読者とより深い対話を求めて、自ら変革していかなければならない。これが今回の再出発の理由であり、また編集委員会と地域研究企画交流センターの決意でもあった。

新しい『地域研究』は、編集方針として以下を掲げる。

第一に、特定の地域や専門領域を超えたグローバル化時代の問題系を地域の視点から発掘し、新鮮なテーマ設定による特集重視の編集を行う。中東の状況は東南アジアのムスリム社会とどのように連動するのか。ヨーロッパの地域統合は、アジアの地域圏構想にいかなるインプリケーションをもちうるのか。先進国主導の環境保全への取り組みは、熱帯林地域の経済と社会にどのような影響を与えているのか。地域別・分野別研究の垣根を超えて、多彩な研究者の協力のもとに、世界が共通して抱える課題を地域の視点を踏まえて考えるためのフォーラムとなることを目指す。

第二に、学術的な貢献のみならず、地球規模の市民の知として、実践的な課題に貢献しうるメディアを目指す。世界各地の言論を積極的に取り上げ、NGOや国際機関等との連携をもとに、実践的な関わりから生成する知に注目する。

第三に、そのために、座談会や現地報告、ブックガイドなどを含めて、従来の学術雑誌の枠組みにとらわれない柔軟な編集方針を取る。

『地域研究』の再出発を可能にしたのは、日本における地域研究に

関わる様々な研究教育機関を中心に構想されてきた「地域研究コンソーシアム」である。課題に即した多様な分野の研究者の協力を要する地域研究は本来的に連携の研究領域であり、『地域研究』は、今後、本年四月に設立されたコンソーシアムを母体として、広範な研究者集団を基盤に刊行する予定である。

社会に開かれた発信こそ研究に命を吹き込む。地域から世界を考える学術雑誌を目指した『地域研究』の再出版に、読者の理解と支援をお願いしたい。

(おしかわふみこ／地域研究企画交流センター)